2024年3月24日  川越教会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丸山　勉

背負い切る人

［ヨハネによる福音書18章13～20、28～30節］

「ピラトは、これらの言葉を聞くと、イエスを外に連れ出し、ヘブライ語でガバタ、すなわち「敷石」という場所で、裁判の席に着かせた。それは過越祭の準備の日の、正午ごろであった。ピラトがユダヤ人たちに、「見よ、あなたたちの王だ」と言うと、彼らは叫んだ。「殺せ。殺せ。十字架につけろ。」ピラトが、「あなたたちの王をわたしが十字架につけるのか」と言うと、祭司長たちは、「わたしたちには、皇帝のほかに王はありません」と答えた。そこで、ピラトは、十字架につけるために、イエスを彼らに引き渡した。

こうして、彼らはイエスを引き取った。イエスは、自ら十字架を背負い、いわゆる 「されこうべの場所」、すなわちヘブライ語でゴルゴタという所へ向かわれた。そこで、彼らはイエスを十字架につけた。また、イエスと一緒にほかの二人をも、イエスを真ん中にして両側に、十字架につけた。ピラトは罪状書きを書いて、十字架の上に掛けた。それには、「ナザレのイエス、ユダヤ人の王」と書いてあった。イエスが十字架につけられた場所は都に近かったので、多くのユダヤ人がその罪状書きを読んだ。それは、ヘブライ語、ラテン語、ギリシア語で書かれていた。

この後、イエスは、すべてのことが今や成し遂げられたのを知り、「渇く」と言われた。こうして、聖書の言葉が実現した。そこには、酸いぶどう酒を満たした器が置いてあった。人々は、このぶどう酒をいっぱい含ませた海綿をヒソプに付け、イエスの口もとに差し出した。イエスは、このぶどう酒を受けると、「成し遂げられた」と言い、頭を垂れて息を引き取られた。

[1]　ヨハネによる福音書と「時」

 ヨハネによる福音書で特徴的なのは、「時が来た」という言葉が幾度も用いられていることです。主イエス・キリストがご自分の「時」というのを深く思った時というのは、12:27-28に次のように記されている所です。「今、わたしは心騒ぐ。何と言おうか。『父よ、わたしをこの時から救ってください』と言おうか。しかし、わたしはまさにこの時のために来たのだ。父よ、御名の栄光を現してください」。 イエス様は、他の福音書では「この杯を過ぎ去らせてください」と、ゲツセマネにおいて祈られた、あの、父なる神様との間の格闘とも言うべき祈りが、ここでは「この時から救ってください」という祈りとして記され、けれどもその直後には「しかし、わたしはまさにこの時のために来たのだ」という、一つの覚悟とも言うべき祈りへと変わっていっています。

その後17章で、イエス様は、父なる神様への、一章全体にわたる、残される者たちへの執り成しの祈りの中で、まず 「父よ、時が来ました。あなたの子があなたの栄光を現すようになるために、子に栄光を与えてください」と、祈っておられます。それはかねてから、弟子たちにご自分がやがて十字架に架けられて死に、そして三日目に復活することを予告していた、神様の定めの時がついに訪れたことを意味しています。そのことは、私たちに一つの驚きを与えます。つまり、イエス様のお苦しみと十字架、また復活ということは、何か偶発的な出来事ということではなく、父なる神様と主イエス様との間で決まった「必然」であったということなのですから。イエス様は、その「定め」を、ある意味粛々と背負って行かれた。私たち人間の弱さや愚かさ、罪も全部ひっくるめて、神様、またイエス様は、ご自分のご計画が進むために、それらを引き受けておられるのです。

[2] 自ら十字架を背負うイエス

今日は19章の中からピックアップして読んで頂きましたけれども、皆さん、後でどうか19章全体をお読み頂ければと思います。19:16後半で「こうして、彼らはイエスを引き取った」とあります。「引き取る」という言葉。何か物みたいですね。そうです。ある意味、イエス様は“モノ化”されたのです。モノ化したのは誰なのでしょうか？ピラト？ユダヤの偉い人たち？群集？ローマ兵？はたまたイエス様の弟子たちでしょうか？―皆がそうです。その「皆」の中には、実は私たちもいるのです。しかしその後で、聖書は驚くべき言葉を記しています。19:17。「イエスは、自ら十字架を背負い、いわゆる 「されこうべの場所」、すなわちヘブライ語でゴルゴタという所へ向かわれた。」―「イエスは、自ら」です！神様とのやり取りの中で決まったこと、深いご計画が成就するためには、イエス様のご意思が必要なのです。イエス様の覚悟が必要なのです。ですからわざわざヨハネは「イエスは、自ら十字架を背負い」と書きました。「背負わされて」ではないのです。意外なことに、他の福音書には出てこない表現なのです。（共観福音書では、イエスの十字架を、キレネ人シモンに担がせた、という描写になっています）。

 イエス様はゴルゴタの丘で十字架にあげられました。それはマルコ福音書を見ると朝の9時だったようです。いかにその前のイエス様の逮捕から審問、またいたぶり、死刑にするためへの引き渡しというのが異例な事であったということが分かります。しかも恐ろしいことにそれは法に則ってのことで、秩序維持という名目の下でのことです。私たちは、「法治国家」であれば良いと言う訳ではありません。それこそ先週見た、イエス様がピラトに語られた「真理に属する者はわたしの声を聞く」ということこそが肝要なのではないか、そう思います。

[3] わたしが担い、背負い、救い出す

イエス様が十字架の上で息を引き取られたのは、昼の12時であったようです。その時のことが19:28以下に記されています。ヨハネ福音書ではそこでイエス様の二つの言葉を記録しています。一つは「渇く」という言葉。もう一つは「成し遂げられた」です。以前にもご紹介した作家・犬養道子さんによる『新約聖書物語（下）』には、この時の出来事を、このように描写しています。

**「渇く者よ、来りて飲め、永遠の生命の水を。我こそ水、と言った者は、十字架刑独特の渇きに悶えていた。天父の杯を飲み干して渇き切っていた。もはやあたりはまっくらになっていた。天地の号泣する時になっていた。イエスは、人々がヒソプの枝の先に湿らせた酢を、末期（ご）の水がわりに受けた。一滴の流動物も、十字架三時間のあとの出血と内部破裂の行なわれた体にとっては致命的な働きをする。イエスの体はとたんに突っぱり、断末魔が来た。彼はのけぞりつつ、「成就した！」と大声で叫び、続いて「天父よ、御手にわが魂を委ねます」（ルカ23:46）と言い言えると頭を垂れて息を引き取られた。三時であった。」**

 私は、「成し遂げられた」という言葉、これは「すべてが終わった」と訳されたこともありますが、それは、主の任務、最近の表現では文字通りミッションが完了したという意味です。主はこれをどんな思いを持って言われたのかわかりません。しかし、爽やかな気持ちではなかったと私は思います。主は私たち人間の罪を全部背負ってボロ雑巾のようになって死んでいかれたのです。神ご自身に等しい方が、生贄の小羊となって、跡形もなく焼き尽くされたに等しいのです。そこまでして、私たちの罪を担うことを止めなかったのです、主は。私は、イザヤ書のこの言葉を思い起こします。―「わたしに聞け、ヤコブの家よ／イスラエルの家の残りの者よ、共に。あなたたちは生まれた時から負われ／胎を出た時から担われてきた。同じように、わたしはあなたたちの老いる日まで／白髪になるまで、背負って行こう。わたしはあなたたちを造った。わたしが担い、背負い、救い出す。」（イザヤ46:3～4）

　神様は、造ったからには最後まで責任を取り、最後まであなたを背負っていく、そして救い出す、と宣言して下さっているのです。…主が「成し遂げられた」ことによって私たちにもたらされたことは何でしょうか？ あのバッハが、ドイツのライプツィッヒの教会の音楽監督であった時代に作った 『ヨハネ受難曲』はその問いに対する素晴らしい回答を歌っているように思います。こういう歌です。

*第32曲. アリア（バス)とコラール*

私の尊い救い主よ、お尋ねします。

あなたは、今や十字架につけられ おっしゃった。「成し遂げられた！」と

私は、死から解放されたのでしょうか？

私は、あなたの苦しみや死によって　私は天国を受け継ぐことは出来るのでしょうか？

全世界の人々への救いはあるのでしょうか？

あなたは苦痛のなかで、何もおっしゃいません。

しかし、あなたは頭を垂れ、無言のうちにお答えになったのです。

「その通りだ！」（ja！）と。

　―イエス様のお答えは十字架のお姿の中にあると。「私は罪の滅びの死から救われたのですか？」という問いに、こうべを垂れて「そうだ」と言っていると。

以前、こういう話を聞いたことがあります。

ある幼稚園で運動会があり、かけっこの競技があった。保護者たちも見学に来た。

とても自信を持って走っていた子が、途中で足を変にひねってしまったか何かで、もう動けなくなってしまった。どんどん後から走ってくる子が追い抜いてゆく。ところが、体は大きいけれども、元々走ることも得意ではない、少し重たい障害を持っていた男の子が、その倒れてうずくまっている子の所までやってくると、その子を助けてあげたいと思った。そしてその動けない子に「大丈夫？」と話しかけ、その苦しんでいる子を、何とおんぶしようとしたというのです。周りはビックリした。もちろんそんなに簡単じゃない。崩れてしまう。またもう一度背負おうとする。周りはそれに心打たれ、じっと見守っていたというのです。それでも一歩づつ一歩づつ前に進んで行った。時間はとてもかかったけれども、ゴールまでおんぶし続けた。背負われた方も黙ってしっかり背負われた。もう拍手喝采が起こって、みんな、涙を流していた、というのです。

イエス様は、私たちを背負い切って下さいました。途中でやめなかった。十字架で極みまで私たちを愛し通された、愛し尽くして下さったのです！主のご受難は受身ではありません。御国に至るまで私たちを絶対に手放すことをしないという、神様の愛の極致、それが十字架です。ただ感謝です。主は 「自ら進んで」　私たちの本来負うべき十字架を背負い切って下さったのですね。お祈り致します。

主よ、私たちは、自分で自分を背負うことは出来ない存在です。それなのに、あなたから離れ、傲慢にも自分自身を神のようにしてしまう者であります。自分では気が付くことが出来ない罪深さ、それをあなたは知り、しかし裁くことなく、深く愛し、自らを神の小羊として下さいました。ご自身を献げ切って下さり、「成し遂げられた」と言って下さいました。今私たちができること、それはあなたを愛し、自分を愛するように隣人を愛し、讃美しつつこの世の旅路を歩むことです。その歩みを歩めるように、あなたが私たちに力をお与え下さい。十字架の主イエスのお名前によってお祈り致します。アーメン。